

震災復興期における都市の文化変容

—モダン文化の諸相と震災の記憶—

日 時：2009 年 7 月 18 日（土）14:00～17:00
会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 1 号館 308-1 会議室
開 会 挨拶：大里 浩秋（非文字資料研究センター 研究員）
パネリスト：千葉真智子（岡崎市美術博物館 学芸員）
内田 青蔵（神奈川大学工学部 教授）
高野 宏康（非文字資料研究センター 研究協力者）
ディスカッション
コーディネーター：川西 崇行（早稲田大学教育・総合研究学術院 講師／
非文字資料研究センター 研究協力者）
司 会 進 行：北原 糸子（非文字資料研究センター 研究員）
閉 会 挨拶



2009 年度 第 1 回公開研究会 震災復興期における都市の文化変容—モダン文化の諸相と震災の記憶—

2009 年 7 月 18 日、神奈川大学 1 号館会議室を会場に、「震災復興期における都市の文化変容—モダン文化の諸相と震災の記憶—」と題する公開研究会が開催された。この企画は、前年度末（2009 年 3 月 14 日）に「震災復興と文化変容—関東大震災後の横浜・東京—」と題する公開研究会を行ったが、都市計画に関する問題に議論が傾き、文化面については不十分であったという反省から、文化面の変化を焦点に再度企画したものである。

講師には、関東大震災前後の商業美術の展示を最近企画された千葉真智子氏、震災前後の文化住宅などを中心に日本の近代住宅史を専攻されている本学工学部建築学科の内田青蔵氏にお願いした。企画した側からは近代政治文化史専攻の高野宏康が講師として参加した。また、企画側からパネルディスカッションの司会・進行を川西崇行が務めた。



まず、美術史専攻の千葉真智子氏は「関東大震災後の商業美術と都市の風景」と題して講演された。震災後から昭和初期、活動を開始した今和次郎のバラック装飾社や、ポスターやショーウィンドウ装飾などの商業美術が広がり、都市の風景を一変させたことについて『あら、尖端的ね。—大正末・昭和初期の都市文化と商業美術—』という展示を岡崎市美術博物館で最近されたので、その成果の紹介から始められた。

大正末、昭和初期の「尖端的ね」という流行語を展示タイトルにすえた『あら、尖端的ね』展では、この時代のモダンで非常に新しいことがもてはやされた時代になるきっかけは関東大震災による都市の崩壊ではないかと考えたからだという。

展覧会では、震災による都市の崩壊に衝撃を受けた池田遥郎などの芸術家、水島爾保布、服部亮英、池辺鈞な

よみがえる都市景観

—震災復興期の「都市美」運動—



日 時：2009 年 10 月 31 日（土）14:00～17:00
会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 23 号館 203 教室
開会挨拶：福田アジオ（非文字資料研究センター センター長）
趣旨説明：川西 崇行（早稲田大学教育・総合研究学術院 講師／非文字資料研究センター 研究協力者）
パネリスト：川西 崇行（早稲田大学教育・総合研究学術院 講師／非文字資料研究センター 研究協力者）
 鈴木 貴宇（早稲田大学オープン教育センター 助教）
 佐藤 洋一（早稲田大学芸術学校 空間映像科 客員准教授）
パネルディスカッション・コーディネーター：
 津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）
閉会挨拶：北原 糸子（非文字資料研究センター 研究員）
司会・進行：高野 宏康（非文字資料研究センター 研究協力者）

どの日本漫画会に所属する人たちが、早くも震災 2 ヶ月後には大阪で震災風景のスケッチ展を開き、また、東京の印刷所のほとんどが焼けてしまった関係上、大阪から出版されたという事実が紹介された。関東大震災が芸術家の人たちに非常にインパクトを与えて、そのリアクションが作品に実った。

前衛的な建築家集団の作品を集め都市の復興をどう表現すべきかについて、バラック装飾社とマヴォなどの活動の詳しい紹介がなされた。バラック装飾社は東京美術学校で図案科の講師の今和次郎、吉田謙吉、飛鳥哲雄といった東京美術学校の図案科出身の学生などが震災を芸術の試練の時と捉え、バラックを美しくする仕事一切、商店、工場、レストラン、カフェ、住宅、諸会社、その他の建物内外の装飾などをすべて手がけていくことを宣言して活動した。バラック装飾社と並んで中心的な活動をしたマヴォは、『マヴォ』という雑誌を出版し、建物、ショーウィンドウ、舞台装置などで、前衛芸術家や、商業デザインを手掛けている人々など、越境的なメンバーを含む芸術団体が都市の建物をいかにおもしろく見栄えよくしていくかという新しい試みを発信したという。

では、こうした活動によって、街はどのように変わっ

て行ったのだろうか。当時の資料によれば、銀座だけが猛然と復興して、非常に都市化が進んだという。銀座、新宿、丸の内などモダン化が進んだ場所は、女性の社会進出を促し、新しい消費を作り出す形でそのモダンな部分が強調された。また、都市風俗だけではなく、都市自体が図案の対象になる。カフェの登場もしかり。要するに、百貨店、企業などが、消費文化を推し進め、美術を取り入れ、作り出される流行というものが社会を支配する。たとえば、銀座三越の開店ポスター、花王石鹸の図案、資生堂のマッチラベルなど、消費文化、企業文化が芸術と手を携えて進展していった時期であった。商業美術が都市の文化の中に浸透して都市の表情自体を変えていったのである。

その結果、商業美術を通して都市をデザインする、都市を美化していくということがデザイナーたちにも



図 1 資生堂練白粉広告



非常に意識されるようになる。芸術と消費が非常に近い関係になったとする。

都市の美観を建築の構造的な部分で表現していくには無理がある。震災後の町並みが、こうした商業美術の台頭で、都市のショーウィンドウ化が進み、可変的でテンポラルな町並みを彩ったと考えてよいのではないか。それこそが都市の美を作るのではないかという当時の商業デザインに関わる人々の意見を紹介された。



内田青蔵氏（神奈川大学工学部教授）は「モダン建築の出現—RC造アパートメントハウスを中心に—」と題して講演された。

ここで主張されたことのひとつは、こういうものが確かに震災後に急速に普及するが、その根は既に震災前にあったということであった。震災で大きく世の中が変わってしまったといわれるが、むしろ、変化の兆しは既に準備されていて、震災をきっかけに加速的に実現されたと述べられた。

まずは、よく知られた同潤会から話は始まった。関東大震災以降、東京と横浜で罹災者のための住まいを供給する目的で、震災の翌年（1924）5月に同潤会ができた。その中の事業の1つのRC造アパートが講演の中心話題である。現在は取り壊されてしまった1930（昭和5）年竣工の大塚女子アパート、1934（昭和9）年竣工の江戸川アパートについて、パワーポイントで内部構造を詳しく紹介された。確かに、80年も前にこうしたハイカラなアパートが計画され、実際に人々が日常をそこで過ごしたということを見ると、うらやましいような、また一種懐かしいような感覚を覚えた。戦後の都市の団地住まいが普及していく先鞭となったという解説に納得

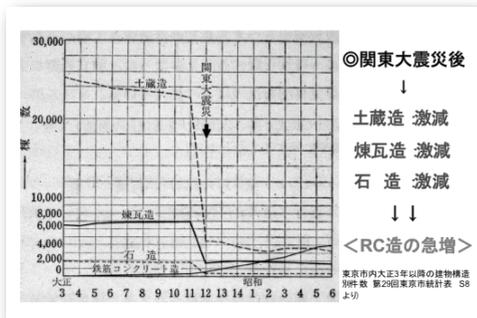


図2 関東大震災前後の建築構造から見たわが国の建築タイプの普及動向

する。

特に大塚女子アパートは、女性専用のアパートであり、

まさしく当時の日本の職業女性の進出を象徴するモデルハウスであった。建築史家としての内田氏の興味は、都市における共同住宅の住人たちのコミュニティを想起させるもの、すなわち、地下の食堂と共同浴場、屋上の庭園、日光室、音楽室というような共同の施設であるという。女性用アパートであっても、各個室には台所が全くない。つまり、女性＝調理、家事という認識を変えたかったのではないか、そのことを意識的にした設計として、社会と建築の関係性を示唆された。また、同潤会アパートは洗濯物とか布団などを窓から干すことは景観上から禁じられ、建物も景観の要素の1つとしてとらえていくという設計思想があったとする。

日本の場合、震災前までは東京の建築は土蔵づくりが圧倒的に多く、レンガ造、そして石造が多少あり、コンクリート造は大正時代はほとんど造られていなかった。それが関東大震災を経て土蔵づくりが激減する。石造、レンガ造も激減していく。それにかわってふえていくのがRC造であり、まさに関東大震災の申し子のような形で出現してきた。

1919（大正8）年に内務省で低利資金の融通策がある。日清戦争、日露戦争を経て、工業化が進行し、都市化が進むと、東京などの大都市の住宅不足、さらには労働者の都市集中による生活問題、社会問題が出てくる。それに対する社会政策の一環としての住宅政策がこの低利融通策であった。大都市では市営住宅事業が展開される。こうした社会的動きがある直後に東京などで大震災が起きた。東京市などが都市問題解決のために蓄積してきたいろいろなデータや、政策を下地にして、同潤会などの住宅事業もスムーズに展開されたと読み取れるという。

また、最後に、同潤会以前の民間の都市型共同住宅の事例として、今も残る1905（明治38）年築の本郷館を取り上げられた。関東大震災を契機にして法的規制で建てられなくなっていくが、この木造下宿本郷館の中庭を囲んだ採光、通風を採るための庭を設けるという構成は大塚女子アパートなどと基本的に変わりないという。木造からRC造に変わったものの、こういう社会的ストックの中で、それを新しい素材、新しい技術に読みかえながらつくっていく。関東大震災は新しい素材、技術を取り入れ、社会全体がそれを展開した契機になったのではないか。さらには、震災復興では都市の文化にいろいろなものが生まれてきたが、その背景にはそれ以前から伝えられたものがあり、震災をきっかけにそれをより発

展させていったと考えることも重要だと主張された。



さて、最後に、非文字資料研究センターの研究協力者で、本企画の立案者のひとりである高野宏康氏は「復興記念館の誕生—震災の記憶のゆくえ」というタイトルで講演した。昨年度以来、わたしたち関東大震災研究グループが調査してきた東京都慰霊堂の報告であった。

現在、墨田区横網町公園には、復興記念館と東京都慰霊堂がある。ここは、被服廠の跡地で、4万人もの避難者が逃れて来ながら、焼死した悲劇の場所である。ここに当時震災記念堂と復興記念館が建てられた経緯、復興記念館展示の展示品の収集過程、さらに現在、これらの施設を震災の記憶装置としてどのように考えるべきかといった点を報告した。

ここで亡くなった人々の遺骸はここで火葬され、震災後の四十九日法要のときに仮納骨堂が作られた。その後この場所をどうするかということで、さまざまな構想があった。たとえば、ここに大仏を建立しようというような話もあった。また、慰霊施設のデザインをコンペで募集したが、1等に当選したものが非常にモダン過ぎるという批判が出て、伊東忠太が設計して、今のような形の記念堂が1930年に完成した。その次の年に展示施設の復興記念館が竣工した。戦時中は接収されて病院になっていたが、戦後、1948年に接収が解除された。

復興記念館の経緯はつぎのようなものであった。1924（大正13）年9月、震災1周年を記念して、東京市主催の震災復興展覧会が上野で開催された。会場は、上野の自治会館と池之端の観月橋際。さらに、1929（昭和4）年に東京市政調査会主催で大規模な帝都復興展覧会が開催された。市政調査会の市政会館の竣工記念展示という位置づけも重なり、入場者数が11万数千人と非常に好評だった。総点数7万点という膨大な展示品が集まったこの展覧会は、官庁主導の公的な性格が強い展示であった。大きな特徴と考えられるのは、図表やグラフの多数の展示である。科学的、近代的に復興を表現し、一般の方にわかりやすい展示ということ意識したものであった。1930年3月24日に帝都復興祭で巡幸天覧展示が行われた。1931年8月に開館した復興記念館はこれらの震災の記念物と復興に関する展示品を継承した。当時の展示は、1階が震災記念品、こちらは震火災から旋風、避難、死者、復興と、まさに追体験できるような順番に展示されている。2階が復興関係資料で、各

種の印刷物や図表やパネルが展示され、総計2,016点。内訳は帝都復興展覧会から引き継がれたものが610点



図3 巡幸路と展覧展示会場

で、新しく一般公募したものが1,406点であったという。

ここで注目すべきは、復興記念館の建物が非常にモダンなものであったということである。外壁はスクラッチタイル、入り口には、怪物が配置されたデザインになっている。中華民国寄贈の梵鐘、犠牲になった子供たちの彫刻なども公園内に設えられた。

ここでの展示の変遷をまとめると、まず、1924年、1周年の帝都復興展覧会では生々しい震災記念物が中心で個人の出品は少なかった。その後の帝都復興展覧会は帝都復興を可視化するための工夫がなされ、図表がたくさん使われた。その直後の天覧展示では展示品が厳選され、復興をよりアピールするものになる。その1年後に復興記念館が開館するが、ここで震災に関する多様な経験や記憶が保存されるようになった。

震災記念物という震災の被害を示すものと、図表という科学的に復興を表現するものを比較すると、天皇が復興の巡幸で天覧会場となった工芸学校や千代田小学校ではこうした震災の物品は展示されず、図表を中心に復興が語られる内容が中心になった。

本体の復興記念館の展示品総数2,016点、このうち震災記念物が932点で半分近く、46.2%を占め、震災記念物と復興資料がほぼ半分ずつの構成で展示された。帝都復興祭や天覧展示では、図表などを通して復興がより強くアピールされたことがわかる。

死者を慰霊する装置にもモダン文化は表出している。図表表現はある種のモダン、すなわち、客観的、合理的、科学的、近代的な表現方法で復興を表現しようという意図があり、これは当時の時代の雰囲気や反映されたものとしてよい。



従来、歴史学の分野では、関東大震災以降、モダン文化への反発から出された、精神作興の詔勅や質実剛健の気風の進展などに議論が集中し、震災後に国粹化していく、ファシズム化していくと理解されることが多かった。帝都復興祭、あるいは天覧展示のされ方などを詳細に検討すると、そう単純なものではないことがわかる。さまざまな時代潮流がせめぎ合っている、モダンというものに関して反発と同調がある。要するに、震災の記憶の問題を1930年代の政治や文化状況の中により総合的に位置づけて検討していく必要があるのではないかとして、高野氏は講演を締めくくった。



ディスカッションの司会は、本センターで関東大震災研究グループの川西崇行が担当した。川西氏は、まず、東京市の1930（昭和5）年3月26日復興式典の記念品メダルを提示された。そのメダルには天皇巡幸の経路、田安門、上野公園、墨田公園、築地病院か、復興小学校か、モダン調の建物が彫られている。メダルの裏側には「緩む心の捻（ねじ）を捲け」と刻され、11時58分で針がとまっている。さらに、震災から10周年（1933年）のメダルを示された。そこには、江戸時代以来のナマズが出現し、洋装だが、古代をイメージさせる女性像がナマズを押えるように配されたものであった。

司会者はこれがなにを意味するのか端的には言わなかったが、復興した近代建造物をメダルの表に、裏には地震＝ナマズという前近代的イメージに女神のレリーフを刻したメダルは、都市装置の近代化と人々の心性に潜む



自然への畏敬のようなものを指摘されようとしたのではないかと思いやった。

さて、議論の中心は、震災の文化的影響をどう捉えるかという点である。千葉氏は商業美術の分野の社会進出

が都市の見え方を変えたという点を強調された。内田氏が強調されたのは、震災以前から居間を中心とした家族団らんの空間を持つ住宅が提案されたが、現実には震災後はほとんどそういうものは消えていってしまい、現実的なレベルで住まいを語っていくことになる。言葉を変えると、大正期は住宅の洋風化が非常に強く押し出された時代ではあったが、むしろ、震災がそうしたものを一瞬にして消し去り、それを背景とした住宅づくりの思想は後退して、理想を喪失させたモダニズムという形に置きかえられていくと捉えられた。震災で余裕がなくなり、生活レベル、市民レベルの住宅文化を楽しみ、それを変容させていく余裕が消えていったのではないかと主張された。

高野氏が、震災復興祭のなかでの天覧展示の意味付けをしようとされたが、これについて、司会の川西氏は、震災のときの摂政宮と帝都復興祭の天皇に対する展示の見せ方に違いがあったのかどうかという鋭い質問をされた。この点に関する高野氏の明確な回答は示されなかった。理由は、報告では歴史学分野での震災後の国粹主義、天皇制ファシズムの傾斜を批判してはいるものの、摂政期と昭和御大典以降の天皇の位置づけの違いを一連の震災展示の経緯からは導き出していなかったからであろう。摂政期の震災直後と即位してからの復興期以降の天皇では明らかに公的存在の位置づけが異なる。震災という危機のなかでどのように摂政を位置づけ、震災復興と即位をどう重ね合わせて国民に見せようとしたのかが分析的に明らかにされなければならないと感じた。高野氏が報告の中で指摘されたこれまで概括的に論じられてきた天皇制ファシズムへの傾斜という歴史学への批判をのりこえるためにも是非とも必要な課題と思われた。

講演者3者の話の中心は、震災の影響という点でのそれぞれ異なる専門領域からのアプローチであったが、バラック装飾社あるいは商業美術のショーウィンドウなどは、汚いもの、見苦しいものを覆い隠して、とりあえず、面白く美しく見せるという無意識的な反作用も働いたと思うが、人々は震災で垣間見た凄惨な都市の光景を忘れたわけではなかった。また、住宅文化の「洋風」の大衆化は否定すべくもないが、より高い次元の自由な創造性を生み出す余裕は失われたと評される結果になったのではないだろうか。最後の3人目の高野氏の報告の、犠牲者の慰霊と復興を記念する展示は、焼け爛れ壊れた記念物と復興を伝え分析する図表類とが半々であったという指摘は震災後の人々の心象風景を如実に語るもので

あろう。

人々はモダン文化に浮かれているように見えながら、実のところ、心の深いところで、震災の悲惨を忘れることはできなかつたのである。そのことが一見モダンでは

あるものの、脆さと華やかさが共存する震災復興文化の性格を形作っているのではないだろうか。

(執筆著者：北原糸子)

2009年度 第3回公開研究会 よみがえる都市景観－震災復興期の「都市美」運動－

はじめに

本公開研究会は、震災復興期における都市の文化変容をテーマにした前回の公開研究会に続いて、震災復興期の「都市美」運動に焦点をあて、関東大震災後から戦時期に至るまでの景観変容について検討することがテーマである。「都市美」運動は、「帝都復興事業」（1923－1930）に並行して民間の団体によって主導され、新たな都市景観の形成にさまざまな形で関与し、大きな成果をあげたが、わずか10年後、戦災によって市街地は再び灰燼に帰してしまう。

この「都市美」運動が震災後の新たな都市景観の形成過程で残した多くの遺産をめぐって、都市計画を専門とし、企画者の一人である川西崇行氏、日本近代文学・モダニズム研究を専門とする鈴木貴宇氏、都市形成史を専門とする佐藤洋一氏の3名が報告を行い、建築史を専門とする津田良樹氏が総合討議のコーディネーターを担当した。



報告1 川西 崇行

帝都復興と『都市美』運動 －震災後の本建築と景観の再整備

都市計画を専門とする川西氏は、震災後の「帝都復興事業」と「都市美」運動について、本公開研究会の総論的な報告を行った。まず、川西氏は「都市美」運動の主な担い手となった「都市美協会」の成立過程を説明した。1923（大正12）年9月の関東大震災後、区画整理や、市街地のインフラ整備を企図した7ヵ年の「帝都復興事業」が進められる中、建築・土木・造園などの領域の人々の他、文学者や美術家なども加わり、多面的に都市の「美」を検討しようとした「都市美研究会」が1925（大正14）年10月に設立され、その二年後の1927（昭和2）年、「都市美協会」に改組された。

「都市美」的な発想の原点は、後藤新平が「帝都復興

事業」にあたって「都市の美観」「情趣ある都市」の必要性を主張し、復興小学校や公園などで実現しようとした動きにすでにみられるという。また、1919（大正8）年に制定された都市計画法にも「都市の美観」の概念が含まれていた。震災復興期にすでにこのような発想があり、その実現を目指した組織や「都市美」という言葉があったことは、ほとんど忘れ去られている。

川西氏は、「都市美協会」の活動で最も顕著な成功例として、「警視庁望楼問題」と「美観地区の制定」を挙げた。前者は、日比谷で罹災し、桜田門に移転した新警視庁の望楼の高さと形状について、新聞などで意見を提示し、皇居の濠の緑地や、当時建設中であった新国会議事堂との景観的調和の必要性を指摘し、望楼の高さを制限することに成功した事例である。この一件を川西氏は、戦後の東京海上ビルをめぐる「美観論争」に先立つこと30年の「快挙」であるとする。

また、後者は、1933（昭和8）年、都市美協会の尽力で、皇居外郭に日本初の「美観地区」が実現した事例である。これに伴い、1934（昭和9）年には美観地区内の建築の高さ制限、翌1939（昭和14）年には美観地区の運用についての「美観審議委員会」が設置され、美観地区も市内の主要な公園や街路に拡張されるなど、まさに日本初の本格的な都市景観の美的な側面からの建築コントロールの仕組みが整備された状況となったが、戦時体制が確立する中で、美観地区の運用は停止され、戦後を待つことになったという。

以上の説明は明快だが、筆者が気になったのは、戦時体制の成立の契機となる国家総動員法の制定が1938（昭和13）年であることを考えると、川西氏が指摘した「美観審議委員会」設置や第一回東京美観審査委員会はいずれも1939（昭和14）年であり、美観地区の運用停止は1943（昭和18）年以降であることをどう考えれば良いのかという点である。ファシズムや全体主義と建築や都市景観の関係に着目する近年の研究動向については言及されず、戦時体制の成立を「美」の否定に直結